

英国の終末期医療

— ロンドンのホスピスの現状 —

宮 坂 万喜弘*

キーワード：St. Joseph's Hospice の成立，第一次大戦・スペイン風邪の流行，第二次大戦とロンドン，第二次大戦終焉と英国社会の復興，St. Joseph's Hospice 訪問，シシリー・ソングースと近代ホスピスの終末期医療，安楽死法へのシシリーの見解，独立した寄金を持つ St. Christopher's Hospice の設立，St. Christopher's Hospice 訪問

昨年筆者は，西洋の歴史にアイルランドが占める特異な事情から現代ホスピスの出現へと連なっていたことを，岡村昭彦著「ホスピスへの遠い道」を糸口で考察した。アイルランドの歴史，Mary Aikenhead メアリー・エイケンヘッドの活動と Our Lady's Hospice の創立，現在のホスピス運動の指標となった経緯を論じた。当時故郷アイルランドを追われた人々は，世界各地へと移住させられたが，その人々の一部は英国にもわたり，ロンドンの貧民街へと流れ着いた。メアリー・エイケンヘッドの精神を受け継いだ Irish Sisters of Charity は，1905 年ロンドンの過酷な貧民街への活動の拠点を実ロンドンの貧民街ハックニーに置く。以来ここに設立された St. Joseph's Hospice はホスピスの指標となって今日に至るまで，人々の生存の支えを提供する施設であり続けている。今回は，ロンドンのハックニーにおける修道女会活動の成立と「終末期医療での疼痛緩和の方法」をほぼ完成させたシシリー・ソングース (Dr. Cicely Saunders) の活動と St. Christopher's Hospice 創立を見るのが主なる目的である。

この論考では以下の順で述べる。

- 1 ロンドン・ハックニーの St. Joseph's Hospice 成立と活動
- 2 St. Joseph's Hospice 訪問
- 3 シシリー・ソングースと近代ホスピスの終末期医療
- 4 St. Christopher's Hospice — 施設訪問
まとめ

第 1 章 ロンドン・ハックニーの St. Joseph's Hospice 成立と活動

1) St. Joseph's Hospice の歴史概略

19 世紀初期，驚くべき気高さと理想を持った果敢な女性 Mary Aikenhead が，生涯を見捨てられた哀れな人々に，若い時から自分の生涯をささげたことは後の世の不幸な人々の救いの指標となった。その後彼女の精神はどのように受け継がれていったのだろうか。ここに彼女の理念を受け継いだ修道女会のロンドンでの活動が始められたときの様子，修道女会が設立した施設 'St. Joseph's Hospice の創立当時の社会状況，そのすさんだ背景が，シスター達の活動とどのようにかかわってホスピスは始められて，役割りを果たしてきたか，過去の時代以来の記録から概観してみよう。

2009 年 11 月 21 日受付

* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授 西洋思想，倫理学，比較思想

(1) 活動の始まりとその時代背景

1900年6月のロンドンには南アフリカ戦争での分岐点の年であった。Mafeking（南アフリカ英国領地名）の救援活動がまだ行われていたのだった。最新の電信機械が1,200人の英国兵のボーア人による攻撃や、病、食料の枯渇での飢えに負けることなく戦い続けている状況を新たな情報として新聞社に送り続けていた。このように勇敢な軍隊の活動に対する声援の気持ちを表し、駐屯部隊の救援の報が伝えられた時、人々は誰言うことなく街頭へと繰り出して歓声を上げて彼らの活躍を祝ったのである。彼らは泣き叫び、歓声を上げ歌い踊った。帽子は空高く投げ上げられ、人々の列に落ちてきた。あらゆる町の大道音楽士たちの手で回すオルガンは歓呼の音色を激しく奏でた。音楽ホールでは女王の兵士達の活躍を讃えて、情熱に溢れかえっていた。新たにMafekingという言葉が流行語となった。町の愛国的な騒々しい雰囲気、ぼろぼろの国旗と勝利のスローガンでまだ街路のあちこちに余韻を残している時、5人の女性達のある企画事業を目的とした一団が、控えめな家のドアを静かに訪れていた。イースト・エンドにある城郭都市Hackneyにある同じような低い家並に、きれいに整頓された一軒の家があった。その家はビクトリア朝の雰囲気、装飾を施された家であった。長いたびの後で新たにここにやってきた5人の人々の住まいであった。最初になくはならなかったことは、彼らの言葉によれば、“全力を尽くして荷を解き、ベッドを設置する”ことであった。一般の人々の心にはこの小さなグループの到着はなんら関心を引かなかった。この新しい住人は自分達を招いた少数の友人だけが自分達を知っているだけであることを心得ていた。先に述べたような時代のどよめきの中で彼らがここにやってきたのは20世紀の始まったばかりの時であった。Irish Sisters of Charityはロンドンのイースト・エンドでの活動の一步を踏み出したのである。

英国社会でのMafekingの救助の興奮が次第に冷めて社会がひと段落し、歴史的な事実となった頃、19世紀のBritish worldは頂点を過ぎ、そ

れほどたいしたことは無かったこの勝利は、英国の壊滅を留めることはできなかった。しかしその権力と荘厳さはなお巨大で、見た目にも厳然としていた。そのほんの僅かな歴史の教科書に名を連ねた見識ある知性を持っている人々のみが、このシステムの中の活動での萌芽を既にはっきりと認識することができた。しかしこのはっきりしない後姿から見て、素晴らしい宗教的な女性達の一団のKing Edward RoadのHackney Street Conventへの到着の中に、将来の神聖な意義があると認めることは、歴史的意味というよりもむしろ空想を求める領域の想像力が要求されることであったであろう。実際は夢想だにすることのできないことであった。エレミヤの木のように、水辺に植えられその川に沿って根を下ろし、苦しみ悩む人々へ、この一団の人々の奉仕は生まれ、その実をSt. Joseph's Hospiceに結んだ。そこは今日全世界のホスピス運動の母なる家として知れ渡ることになった所である⁽¹⁾。

(2) メアリー・エイケンヘッドの基盤的活動の概略とIrish Sisters of Charityがロンドンで活動するまで

“注目するべき一人の女性の精神が120年前に去ったにもかかわらず彼女の設立したSisters of Charityの施設を今も見守っている。彼女の手紙や彼女の生涯の困難の中で表明されていたように、彼女は今の時代も修道会を指導しており、彼女の名前を知らずに、また彼女の人格に感動することなく、このシスター達の奉仕活動のいろいろな側面を描くことはできない⁽²⁾。”

Mary Aikenheadと呼ばれた女性の並外れた人柄とその目標への姿が、ほかの若い女性達の心に訴えかけ、多くの若い女性達が彼女の姿を見習おうとして後に従った。アイルランドでの活動が始められた1815年、彼女は宗教団体、Sisters of Charity修道女会を設立した。最初の基地はアイルランド・ダブリンの小さな孤児院であった。そ

の活動は、病気のため貧困のため家で病んでいる人々を訪問して、細かい手助けをすることから始められたのだった。これに加えて初期の困難な仕事は、死刑執行を待つ女性達の慰安の活動であった。時代は少しずつ次第に過ぎて行った。そして困難な中での時間は経過して行き、今では継続的に苦痛に襲われる病床にしながら指揮する Mary Aikenhead の指揮の下、修道会は病で苦悩する人たち、ホームレスの人たちのためのホスピスと、貧しく学校に行かれない子供達のための学校を設立したのだった。彼らは貧しい人々に希望をもたらし、コレラやチフスの爆発的感染による荒廃を救済した。修道女会のメンバーが増えていったので彼らの活動範囲は拡大し、創立者 Mary Aikenhead も 1849 年に既に亡くなっていたのだが、その修道会は更なる活動をし、1900 年に彼らは英国にやってきたのだった。この行動は Vaughan 大司教がロンドンのスラム街で病んでいる住人の救済を約束したことに答えてのものであった。

(3) Irish Sisters of Charity の活動開始

ロンドンに到着した最初の 5 人の修道女達は偶然にも親切なユダヤ人の女性からハックニーのあの小さな家を譲られた。この家を拠点にして、彼女達は寝たきりの人たちのいる家々に出かけて行くことができた。修道女達は繁栄の中にある貧困にあえぐ人々の病む姿と、惨めさに対応することの困難さの中で、ひたすら忍従と献身の日々を送るのだった。やがて時間が流れて、この小さな拠点だけで活動することの限界と誤りに気付いた。彼らに隣接している家が確保されて使用できるようになった時、彼らは共同病棟を提供できる建物を結合し改造した。これが現在の St. Joseph's Hospice の始まりであった⁽³⁾。

彼らの最初の患者が 1905 年 1 月 14 日友人達によって運び込まれた。間もなくホスピスはその収容能力が拡大される必要に迫られる事態になった。同時に黙々と奉仕に勤しむ感動的な活動が広く社会に認知されるようになると、ボランティアの支援の輪が後押しすることになった。その結果非常

な速さで更に 4 棟が必要だとされて改築され、始めの建物に増設された。公衆の喜びは計り知れなかった。そして時間の経過に伴う時代の変化が、人の社会生活の流れに影響を与えることになる。

(4) 第一次大戦とロンドンの活動状況

時間は経過していった。St. Joseph's Hospice の成立する直前のロンドンの状況を見れば、患者の増加が著しかった。看護の対応がなされて次第に施設も整っていく。しかし 1914 年オーストリアのアルクドック・フランシス・フェルディナンド皇太子がサラユェボで暗殺されたことが引き金となり、ヨーロッパは戦場となったのであった。その後の四年間、初期の頃は戦争の予感を感じられなかった。しかし「巨大な戦いの真実が、ゆっくりと進入してきた。いたるところで死別の報道が聞かされ、前線の戦いで家族の誰かが犠牲とならぬ家はほとんどなかった。もはやここ東ロンドン地域には貧しい人しかいない」⁽⁴⁾と修道会の年次報告書では報告している。海を隔てた大陸のベルギーから逃れてきた避難民は、修道会にも収容され介護を受けた。ツェッペリンの空襲が行われたが、第二次大戦に比べれば、その回数はあまり多くはなく、死者も規模もはるかに小さかった⁽⁵⁾。ロンドンの市民は人間の手による空からの破壊を、世界で最初に体験した人達であった。この間も毎日戦場では、若者の生命が無残に散っていった。そしてホスピスの人々は深い悲しみに巻き込まれつつも活動はひと時も停滞することはなかった。

戦況の推移に伴い、犠牲者の数が日々増大し、黒服をまとった女性や男性が弔いの列に加わる姿がいたるところで目に付くようになった。足をなくし、腕を奪われた人、目を失った退役軍人が街の中に見慣れた光景になった。

1918 年冬のある朝、ついに戦争が終わった。役所も工場も閉鎖されていたが、再びロンドンの街に歌や踊りが歓声の声と共に満ち溢れる以前の街の姿に戻ったのだった⁽⁶⁾。

戦争は勝利に終わった。とはいえ、750 万人の英国人兵士の死や、残された寡婦の嘆き、父親を失った子供達や後に残された両親、そして手足を

失い不具となった2万人の若者達や、目をなくし醜い姿となって生活せねばならない人々の暗い影によって、喜びの気持ちはかき消された。人的損害は予想以上の耐え難いものであった。そして国の物質的資源もほぼ壊滅的な状態であった。社会の変化も大きく、帰還兵は彼らの“目上”の人に礼節ある振る舞いをしなくなった⁽⁷⁾。

しかし銃声爆撃が止んだ後家庭の安らげる生活が破壊されたこと、そして命を賭けて国家に奉仕をした後、生活のための仕事が見つけれず、苦勞の意味の無いことが明らかとなったことにより、人々の心はしばしば激しい憎しみと幻滅に変わった。国家の態度は彼らの運命にさして配慮しなかったからであった。ただ戦争関係の産業にあずかった武器弾薬の生産工場が、多くの従業員に復職を認めたのだ。それ以外に働ける場所の展望は見出せなかった。女性の衣装もマナーも自由に振舞えることになり、以前のように素直に役割をこなす状況にはならなかった。概して言えば、市民社会を不安にするための有り余る不信感が生みだされて、戦後の将来を思って祝賀することなどまるでできない事態だったのである。

(5) スペイン風邪の流行

1918年冬、悪名高い激毒性のインフルエンザ（スペイン風邪）が英国を襲ってきた。この災難の到来で、戦場から帰還できた何千人もの人は突然、死へと追いやられたのだ。家族全員が犠牲者となって倒れ、誰一人彼らを看取る者がいないこともあった。ホスピスは患者で溢れた。医師や看護師たちも次々と倒れていった。もし死を免れても、東ロンドンの過密な地区に住む住民達は非常に残酷な状態になった。疫病の到来に隣人同士が互いに相手を避けあった。接触伝染を恐れる不安感から、相互に他の人を助け合うことをしない状況が出現していったからである。

修道会のメンバーはこの荒れ狂う事態をも乗り越えて、収容されてきた人々を看護した。打ちのめされた家族に食料を提供し、母親が倒れた乳飲み子たちの面倒を見た。そしてこうした重篤な伝染病の中、昼夜働き続けたとはいえ、修道会のメ

ンバーは誰一人このインフルエンザで倒れる者はいなかったのである⁽⁸⁾。

1920年戦後の社会が次第に活動をはじめようになる。St. Joseph's Hospiceの寄金集めのために名士が集うダンス会が開催され、寄金が集められた。一般庶民に向けてはフラッグ・デイ（国旗の日）が設けられて、生活のための日用品のチャリティーバザーが行われ、庶民の理解で1,300ポンドもの寄金が集められた。

当時の庶民の健康、教育、生活の水準は次第に改善されてきたとはいえ、英国は大変な不公平社会であり、最も弱い立場の市民が時代の産み出した負の部分の犠牲者とならざるを得なかった。恒常的な貧困は改善されないままであり、低賃金、長時間労働は容赦なく無力の人の生活に襲いかかり、経済問題での戦いがいたるところであった。1926年にはゼネラルストライキが起こり国は分裂寸前となった。

Hockstonでの活動は30年以上を経ていたが、あまりに人々の生活が貧しいために、地域の集会の場所やその維持すら確保できなかった。さらに1929年10月に起こったアメリカ発の世界恐慌で世界経済は崩壊し、何百万の人々が何年にもわたって失業し、失業手当の公共扶助査定調査が導入された。多くの人の常識が失われてしまったような状態が出現した。女子供の賃金は男よりはるかに安いものであったため、職を容易に見つけられた妻や子供に男は依存するようになった。

ほとんどの男達が食を探して国を放浪していた。その中には元兵士達もいた。HackneyやHoxtonでのシスター達の望んだ親切な奉仕活動は困難な状況となった。

とはいえ仕事を持っていた人の事情は異なっていた。物価は落ち着いてきていたし、人によっては家を所有することすらできた。この状況の中でスポーツへの関心がたかまっていく。1930年代のボクシングは貴族階級の人気を得て高級な芸術と言われ、慈善事業として庶民にまで支持されるようになった。ホスピスへのチャリティーの試合も行われ「死んでいく人達を助けるために命を賭けて戦う人を見ようと集った人を見よう」と観客

達は、代金を払って集った⁹⁾。そして新たな電気産業が始まり、教育の分野でも改革の動きが始まろうとしていた。このころ、再びいやな空気が漂い始めることになった。

1936年スペイン内戦が始まり、ドイツでのユダヤ人の迫害の情報もたらされるようになったのである。

(6) 第二次世界大戦と Irish Sisters of Charity 修道女会の活動状況

1939年の秋、それまでの生活は再び挫折することとなった。行政府は市民防衛法に基き、修道会のホスピスと介護施設の引渡しそして移転を命じた。敷地建物は都市防衛の名目で差し押さえられ、強制立ち退きが始まった。人口密度が高く、最も攻撃を受けやすい地区の、市街からの立ち退き命令による疎開計画が立てられ、戦争が始まらないうちから攻撃への対応は用意されねばならなかった。灯火管制命令の早さが人々を狼狽させ、すばやい処理がされねばならなかった。1940年夏、いよいよロンドンの爆撃が始まった。このときホスピスはバースと温泉の出るウェストカントリーに保養地を築いていた。空襲から逃れることはできなかったとはいえ、6年をここで過ごすことになった¹⁰⁾。

ロンドンの街が空襲され、多くの市民が犠牲となったことがニュースで伝えられた。空襲から逃れられると考える人は誰も居なかった。1942年春、ドイツ軍は軍事的な重要地点以外の名所旧跡地を爆撃し始めた。バース、カンタベリー、ヨークといった歴史的な場所へのものすごい連続爆撃が行われた。バースは戦争のための軍需工業の中心地となっていて、ブルストルの重要な港からわずか12キロしか離れていなかった。したがって敵の空襲目標であった。患者が亡くなった折はそのベッドが空くとすぐに患者は補充された。

これに対して英国空軍はドイツのリュウベックのバルチック空港とロストックを叩き潰した。そしてドイツ軍はロシアに侵攻するという失敗を犯したため、以前のように英国の重要拠点を総力で攻撃することはできなかった。

バルチック海での英国空軍の活躍は見事であった。これに対するドイツ軍の弱さが明らかとなった。ドイツ軍はベデカーに市民の殺戮の空襲を仕掛けた。ストラッド・アポン・エイボンの街は銀のリボンのように吹き飛んだ。ドイツ空軍は街の通信部を攻撃した。ガスタンクが吹き飛んだ。街の通りがくっきりと見えた。そこは炎と破壊が荒れ狂っていた。次々と繰り返される波状攻撃の爆発によって、街は炎に嘗め尽くされた。「この夜は市民が他国によって引き起こされた正に恐怖の夜であった。エイボン川の峡谷は火の海となり、St. Joseph's Hospiceの建物はこの街の最悪の場所に位置していた」¹¹⁾。恐れていた最悪の事態が始まったのだった。爆撃機の唸りが聞き取れた時、患者達は既に地下防空壕に運び込まれていた。街は次々に襲い掛かる波状爆撃で一面が揺れ動いていた。台所に避難していたシスター達は廊下へと投げ飛ばされていた。爆発で窓やドアが吹き飛んだ。5分くらいの距離に立っていたホスピスは、塵と黒い煙の雲で覆われ、爆発の中で視界から消えていた。前の庭で巨大な爆発があった。ものすごい衝撃が起こり建物の階段の上から窓の破片が粉々になった落下してきた。二日にわたり起こったこの街での出来事は、他のいたるところでも起こっていた。街をすっかり破壊しつくした爆撃は、他の多くの都市をも攻撃し、莫大な被害を与えた。主要な水、ガス、電気、交通などの機能は全て壊滅した。空襲警報の解除報道の後、生存できた人達はシスター達と共に彼らがどんなに幸運であったかを思い知ったのだった。

(7) 第二次大戦終焉と英国社会の復興

1945年困難な戦争が終わった。5年間の戦争での戦いの後、明かりが町中に戻った。この戦争で6万人の市民、33万5千人の陸軍と海軍の兵士が犠牲となった。家は破壊され家族は分断されたが、英本国は復活したのだった。復興に向けて再建の活動が行われるようになると、戦争で遠くに避難していた多くのシスター達がバースから以前のホスピスに帰ってきた。建物の復元の間も、前からの教区の市民への奉仕活動が始められた。爆撃の

予防のための窓に積み上げられていたレンガが撤去され、壁が洗われ、窓が整備されて整えられた。修理作業は際限がなかった。しかし次第に施設は修復されていった。1946年6月、バースにいた7名の患者が列車と救急車で運ばれてきたのだった。

1947年まだ戦争の傷跡はいたるところに残されていたとはいえ、St. Joseph's Hospice は再び元の活動に戻ったのであった。

戦後6年間の停滞が続いた。そしてこの間、英国社会は戦後の社会変革のために集中的に努力した。困難な戦争の後ではあったが、十分に自信を持って生活を変化させるため、将来の遠大な計画のための新しい法律を作っていたのだった。新しく外国からやってきたこれまで馴染みのない住人達（旧英国連邦からの移民）のために新基準が打ち出されたが、英国人達はじっと耐えた。それが今では日常のこととなった。しかし以前の戦争時代の大量失業は再び襲ってはこなかった。戦争の体験は西洋社会に何の変化ももたらさなかった。カトリック教会と宗教界の社会は、残され見放された人々の生存に何時も傍にいたことが使命であった。彼らは痛ましい社会での重要な役割りを担っていた。

さて大戦後の疲弊した社会の中で一時、結核が流行し、1922年にはバルコニー付き3棟の病棟が増築された。そして30年後、結核でなくなる人が少なくなった時、シスター達の主なる活動は終末期のガン患者達の介護に集約されるようになったのである。第二次世界大戦の後では Irish Sisters of Charity の営む 施設の一部棟が建築されて、1957年開所となった。その3棟の中で、後に述べるシシリー・ソングダースの介護による、最初の臨床医学の終末期医療、すなわち疼痛緩和に対する管理と技術を駆使する、心使い細やかな介護が行われていくことになった。

なかなか苦痛の去らない病状を抱えた患者の苦しみに対処する必要がある、手をこまねいて見ることができない強力な挑戦意欲を掻き立て、なんとしてもこの事態を解決せねばならないとの強い要求となった。そこでこの付属の施設の St. Patrick's 部分棟の3階建て箇所慢性疼痛を抱

えた患者のための、21人収容の施設が建てられた。1965年のことであった。1922年まで使われていた古いサナトリウムが1970年頃になると建築上危険となってきていた。そこでこの改築の資金集めが検討された。1957年までこの再構築は不可能であった。その後この地域の最も緊急なる要求事項として、肉体的な障害を持つ人々のための宿泊リハビリセンターの必要性が認識された。これは Irish Sisters of Charity の財団にとっては、全く新しい領域の事業を試みるものとなった。更に付属の Henan House は26人の障害のある居住者に対して、専門的に設計された設備の整った施設として建てられた。次の20年間の間に数え切れない身障者が機能回復のために支援を受け、専門的な指導者の指導の下での言語の機能訓練を受けたのだった。

残念なことこの素晴らしいサービスも1977年、資金困難な事情から終了せざるを得なかった。St. Patrick's 部分棟の全居住者移転のために Henan House は完全に修復された。この建物は現在益々拡大する地域緩和センターチームの戦略的指令部となっている。Norfolk 部分の箇所は、尊敬に値する後援者である Norfolk 公爵夫人の名をいただいている施設であった。彼女は二重の目的のための基金集めに功績を示したのだった。双子の教育とデイ・ケアセンターが1984年に女王クイーン・エリザベス二世によって開所されたのである。

以上がメアリー・エイケンヘッドの修道会がロンドンで根を下ろし、現在世界の指標となって活動する St. Joseph's Hospice が辿った歴史的事実である。

ここで現在の Irish Sisters of Charity の財団によって運営される St. Joseph's Hospice の状況筆者が訪問した折のデータから見てみたい。

第2章 St. Joseph's Hospice 訪問

1) 施設の状況

「何をどのように行い、誰がこれに関わり、今後のために何が考えられ、どのように貢献できる

というのか」。これは緩和医療のための世界保健機構の宣言文である。

ロンドンの50万人のこの地区の人々の生命に関して関係をもち、死を認め、身内の人の困難に心理的なサポートをするよう貢献してきた施設が、世界的に有名なこのホスピスである。バングラディッシュからの移民の人数が最大の人口集中地である東ロンドンの街中にある。ここは英語の話せない人も多く、経済的にも貧困な地域である。したがって他の地域のホスピスとは異なった、社会的問題をたくさん抱えている施設である。

終末ガン患者や、心不全の人、困難な症状を抱えてここに来る子供などを対象に、各人に適切に対応することが必要である。宗教的な面では食事の問題、多くの外国人のことばの（イスラム教徒やユダヤ教徒の禁じられている食元など）文化的な面で医者とのコミュニケーションの問題から、家族・親族が来て宿泊するための個室の確保の問題などが多々ある。そして宿泊用のベッドは48床がここに用意されている。多方面の要素を含めたケア・アプローチは患者の全てのニーズに応えることが理想であり、人体の苦痛は無論、嘔吐、不眠の原因などを取り除くことも必要である。1～2週間をここで入院して治療し、症状が抑えられた後また家に帰っていくシステムも採用されている。これまでのコミュニティー・ケア・チーム（在宅看護チーム）の、400例の実績が今の活動に大いに役立っている。

週に4日のデイ・ケアがあり、ここではいろいろな症状の人が来て社交の場が持たれている。補完セラピー、指圧、針、アロマセラピー、リフレクソロジー、などの希望者が多い。チームのメンバーや、栄養士はじめ多種・多方面の人の協力と設備やメンテナンスが準備される。家族、サポートチーム、宗教的分野の事務管理、財務募金支援を目標に教育センターのスタッフ、ボランティアなど250人の皆の協力がこの施設を働かせている。募金活動、慈善活動、電話での依頼、大企業からの人的奉仕提供、資金サポート、運営経費の提供など、およそ年額1,100万ポンド、約28億円がかかるが、その費用の4割が行政から支給

される。残りの6割を自己調達しなくてはならないのだが、優秀な募金活動部門がここにはあって、1日2万ポンドを得てくる時もある。1日500万円くらいの出費が現状である。貧しい地域でのこの施設での現実であるが、人々の理解がこの施設を100年以上にわたり支えてくれてきたのであり、現在もまたそうした活動途上にいる。

2) この施設の組織

所長

医療担当：Dr. チーフ、そのもとに医療コンサルタント

財務部門：リーダーマネージャー、所属事務員

募金部門：リーダーチーフ、所属事務員

ケアサービス部門：部長・副部長、ナース、ソーシャルワーカー、地域医療担当医、コミュニティー・ケアチーム、宗教部門：リーダー、各支援組織

将来の希望は家で在宅医療をしたいと願う人が多く、これに十分対応出来るようにしていくことが望まれる。救急看護専門のホーム・ケア・チームには突然の変容があってもすぐに対応・処置が施せるように、すでに整理されたこれまでのデータに基づく看護上の対応を教育している。現状では家庭で終焉を迎える人は30パーセントくらいであって、70パーセントの人々がそれを望んでいるが、まだ希望に添えない状況である。現在は身体的骨の痛みをコントロールすることのほうが、心の苦痛を緩和することよりやさしい。つまり精神的・霊的痛みの緩和は非常に難しいということである。

患者にはここに入所するとき、これから起きるであろう症状の推移や事態に対する教育を行う。短期滞在での患者の場合は先ず自覚症状のコントロールを1～2週間、脊髄がんコントロールを1～6週間くらいするのが目安である。いろいろな症状・状況の患者に適切な対応がされることが必要であるため、現在もロンドン大学やSt. パーソロミュー大学、ロイヤルナショナル病院の精神科などと共に、心不全や精神療法の研究を提携して共同で行っ

ている。またここでの必要な 65 の言語での対応も試みられるべき努力目標である。院内の実際の状態は公開し、社会の理解が得られるように、また患者のサポート情報を家族に提供し安心してもらうようにする。皆の理解と協力により、更に良い方向に改善していく努力が求められていると思う。

ついでこの Hackney 地区のホスピスから近代ホスピスの設立への歩みを、シシリー・ソンドースの活動から跡付けてみる。

第 3 章 シシリー・ソンドースと近代ホスピスの終末期医療

1) シシリー・ソンドース (1918-2005)

シシリー・ソンドース⁽¹²⁾ は近代的ホスピスの生みの親であり、育ての親である。彼女は、裕福な不動産事業家のやり手の父親と病氣勝ちであった母親の長女として第一次世界大戦が終了した 1918 年 6 月 22 日この世に生を受けた。そして彼女が創った St. Christopher's Hospice で、2005 年 7 月 14 日、その生涯を閉じたのだった。享年 87 歳 (1997 年 5 月、彼女は日本も訪れ「架け橋としてのホスピス」というタイトルで講演をしている)。

ソンドース医師は母親が弱かった家庭の事情も在ったことと思われるが、社会における活動の発端は、「学生時代のころを先ず捕らえた看護の世界であった」⁽¹³⁾。

また第二次大戦の時代を体験から、応急手当と家庭看護の分野のイギリス赤十字の試験を受けた。しかし、両親の反対からこの夢の実現はこのときは見送られている。

1938 年に第二次世界戦争が始まると共に、ナイチンゲール看護学校で看護婦の仕事が始まった。この看護の世界はシシリーが最も適する仕事と感じるものになっていた。家族の反対を押し切り、看護婦の道を歩む決心をした。その後彼女は親譲りの脊椎異常の障害から、看護婦としての仕事が続けられなくなることも考えられた。それ故医療ソーシャル・ワーカーとなる決心をする⁽¹⁴⁾。これは

戦後 1948 年国民健康サービスの制度が整備されたことに関係があった。そのため彼女は以前に学んでいた聖アン校に 1944 年に復学し、学位と証明書を受けた。1950 年代後半、ソーシャル・ワーカーの仕事は実務面、理論面での知識が求められることになったため、その対応がなされたのだった。その後、背中の手術を行い、ラミネクトミー処置が為されて苦痛から解放され、以前より気分が良好となったので、1947 年聖トマス病院のスタッフとして勤める。これはソーシャル・ワーカーの肩書きでがん患者を専門にする仕事であった。シシリーはこのとき、「既に 6 週間、がん患者の看護の特別トレーニングを英国王立ガン病院で終えており、この分野を今後専門にしようと考えていた頃であった」⁽¹⁵⁾。

シシリーがホスピスケアを志すに至った経緯についてはしかし、とても悲しいエピソードがある。ある時彼女の受け持ちに、ポーランド系ユダヤ人の David Tasma という 40 歳のがん末期状態の患者がいた。シシリーと David は看護師と患者という関係ではあったが、二人の間にはそれ以上の気持ちが芽生えたのであった。David は、亡くなってゆくのだが、彼は遺言に「自分たちのような患者のために働いて欲しい」との意志を彼女に伝える。この Tasma とのことはもう一度後の 4 章でもふれるが、とにかくひとりの女性が個人的にこのポーランド人の男性に出会ったことから医師となる決意をし、終末期医療を施すホスピスの活動に貢献しその心の持ち方が一つの運動として世界中に広まっていくことになるのである。

2) メアリー・エイケンヘッドとシシリー・ソンドース

アイルランドのメアリー・エイケンヘッドの起こした事業の流れの一環はすで見てきたように、ロンドンのハロルドクロスのハックニーに 1905 年創立された St. Joseph's Hospice の経営という形で営まれ、特に教育と病人の看護のような実践的な仕事を行っていた。一方シシリー・ソンドースは 1957 年 4 月 39 歳で医師の資格を与えられた。外科学では成績優秀者の表彰を受けたのだった⁽¹⁶⁾。

卒業後彼女は父親の古い友人でセント・メアリー校の薬学科の教授に会った。この教授は、痛みのメカニズムと麻薬の作用について研究しようとしていた。その頃ガンの末期患者の痛みについて研究している人はひとりもいなかった。全く新しい痛みの分野の中心にいたこの教授はシシリーを研究に誘ったのだった。この教授の下でメアリー校付属病院での研究が始まったのである。彼女と同じこの施設の研究員は20名いたが、末期患者の痛みを専門にしているのは彼女だけであった。シシリー・ソングースはここにおけるガンの終末期患者の管理と介護に関係もしていた。1958年シシリー・ソングースがSt. Joseph's Hospiceで研究を初めた時、ここには150床の看護のベッドがあり、そのうち40から50床は悪性の末期症状の患者が居り、残りは帰る家のない虚弱な老人患者とリハビリができない長期病弱患者達であった。国民健康保険制度の支援は受けられないこうした人々を一般のサービス活動と特別な寄付金などの契約によって、ほとんどの患者は無料で世話がされていたのである。

修道女達のうちで正式な看護教育を受けた者は3人しかいなかった。残りは皆補助員として働くアイルランドの少女だった。皆が信じられないくらい勤勉であった。彼らは一週間休み無く働き、一年を通して2週間の休みがあるだけであった。けれども看護は行き届き、修道女達は何時も穏やかで全体の雰囲気は温かかった。医療的行為は単純なものであったが、患者達は痛みと不安の中で、自分達が受け入れられていることを感じていた。修道女達は、激的な痛みをどう抑えるかの訓練は受けていなかった。末期がんにつきものの悲惨な症状、たとえば抑えようのない吐き気や呼吸困難にどう対処したら良いのか分からなかった。専任の医師もいなかった⁽¹⁷⁾。

そのような状況の中でこの施設での介護と医療に従事したシシリー・ソングースにとって、その創立者メアリー・エイケンヘッドの女子修道会 Sisters of Charity の精神は、当然知り尽くされていたであろう。献身的に働くシスター達の姿に接しつつ、シシリーが医学的な対応の中で苦難に

あえぐ患者やシスター達の困難を乗り越えられる方法はないかと一身に努力していく姿が浮かんでくるようである。しかし彼女はカトリックの宗教界にいる医師ではなく、英国国教会の信仰を抱いていた。とはいえまた英国国教会の強い影響下にいるのでもなかった。彼女はただ患者を快適に過ごさせてやりたいとの願いを中心とする環境を確保するために、どうしたら最も患者自身にいいのか、これからの看護のあり方とその進む道を求めていた。その意味で偉大な女性の歩んだ道はカトリック教会の世界から更に広い宗教の世界的広がりへと拡大するきっかけとなったと思われる。

実際現在の St. Christopher's Hospice においては宗教の差別などは一切ない。しかし St. Christopher's Hospice が設立されるまでには、まだ道のりは遠かった。シシリーは働いている社会的状況において、当時の現存の教団の協力、つまりこれまでの実践を積んだ教団の力は確かに必要であると思っただけではなかった。とはいえ彼女の気持ちの中では、その背景と方向性を持ち、協力を得つつも修道院外の組織を創るのか、またはまったく新しい共同生活体としての施設 (Home) を創っていくのが良いのか、彼女は考えていたのであった⁽¹⁸⁾。そのために彼女が考えていたことはスタッフは自由な精神を持ち、外見的には多様な宗派に属するように見えても、患者を救うという天職の意識ではまとまりを持っている共同体を計画していた。宗教的宗派と才能をこえて、一つの目的の統一を掲げたこれまでにない共同生活の施設が目的であった。彼女にとってはどのような信仰を持った人に対しても、この施設は開かれていることが大切なことであった。

3) 「安楽死法」に対するシシリーの考え

ヨーロッパ社会の終末期医療において議論の多い安楽死問題について、彼女は明快に反対を表明している。それは多くの経験と熟慮を重ねた上で導き出されたものであった。その見解は第一に痛みのコントロールはほとんど常に可能なこと。患者は自分を失わないで心も身体も覚醒しつつ、快適な状態に保たれること。身体的な苦痛からの逃避

はもう必要はないということ。第二は人の本来の性質からして本人の意志から安楽死選択がされることはそう長く続くことはないだろう、との見解があった。もしホスピスケアを誰でもが受けることが可能なら、安楽死のような問題はほとんど起きないだろう。「自主的な安楽死を合法化することは、弱者に圧力を加え、その援助を差し控える無責任な行為である。それは弱い人と、年老いた人や身体の不自由な人、死に逝く人々に払われるわれわれの心からの尊敬と責任感を無にしてしまうことになる。私達はそのような否定的で、無知で、不幸な法制化をもたらそうとする、どのような試みにも抵抗すべきである」⁽¹⁹⁾。ということは患者達に対する十分な配慮が為され、身体的苦痛が取り去られるばかりか霊的不安である死に対する不安が解決されると共に、患者の自尊心から家族や職場の社会的な対応にまで及ぶ苦悩を介護する施設が、チームを組み、受けとめ、対応してゆくことが前提となるとシシリーは考えていたということである。

既にホスピスで痛みと症状のコントロールは成功しつつあったので、以前に考えていたより多くの患者を、家で在宅介護に移せるようにできることが判ってきた。そして事実現在、St. Christopher's Hospice は二種類の患者のケアをしている。片方は一週間ほどで亡くなっていくと思われる患者がこの施設にいる。他方はホスピスで最後の時間を過ごすためここに送られてきたが、痛みがコントロールされ、症状が緩和された患者である。彼らは一日でも数日でもあるいは数年でももう一度安心して家に帰ることができる。その後のサポートは地域の開業医と保健婦にケアが引き継がれ、イザという時にはこの施設と連絡を取りつつ在宅ケアの路線は実践されていくのである。この構想を理解する環境が整っていない時、当時の医師から支援と理解を得て、この在宅ケアを軌道に乗せるまでの困難をシシリーは St. Christopher's Hospice の仲間と共に乗り越えていったのだ⁽²⁰⁾。

4) 独立した寄金を持つ St. Christopher's Hospice の設立

シシリーは 1965 年に St. Christopher's Hospice を創立した。ホスピスを創ることを願い続けたシシリーは、患者の社会的、精神的、肉体的様態を十分に理解できる条件が整えられた終末期医療のあるべき対応を、世の中に実践しつつ知らせる任務を負った数少ない偉人であった。そうした対応がどのようにできるのかというホスピスの構想で先ず問題であったことは、患者の気持ちを理解し、患者の観点からすれば、受けている対応がどのように感じられ、患者の側に見えるかを知らなければならないということであった。ホスピスや死の臨床の真髄は「患者と看取る周りの者達の関係はあくまでも平等な意識の下にあるもの」ということであった。そして成長と発展を経ていく中で生き残っていくこの活動の根源は何時も財政的問題であり、医療的、組織的問題であった。このうち医療的な問題については彼女は 10 年間以上の時間をかけて死を看取る学びを行い、どのような苦痛も和らげることができるとの自信を持つことができた。組織と、資金の問題では理念に基づいた正しい運営とその組織の発展は、もしその冒険が正しければ、きっと達成できると彼女は確信を抱いていた。彼女は「神を中心に置いた考え方を持ち、医療に向けた豊かな資質を備え、更にやる気と行動力と献身を持ち合わせていた」⁽²¹⁾。この構想は祈りと熟慮と討論と長い時間をかけた検討を通して、次第に解決をしていくやり方であった。「シシリーが強く求めていたことは、——何よりも患者にとっての、そしてスタッフにとっての——真の安心を与える環境であった。この活動の先ず重なる苦悶は、その拠って立つ精神的基礎のコミュニティ——の性格づけを決めることであった。文書でキリスト教を信仰する人が利用できる教会または礼拝堂として団体が運用するもの」⁽²²⁾が決定された。この団体が「死のケアの取り組み方について研究を進めることと、医師や看護師の耐えざる研究、教育、訓練を進めること、ホスピスの中だけでなく患者が自分の家でもケアを行う

ことができること」⁽²³⁾の推進の3項目が決められた。

1960年代の初め、St. Christopher's Hospiceの建設計画はうまくいかなかった。それに加えて最愛の父親や心の友達の失われることが続いて起こった。この時期の苦痛と混乱、そして激しい精神的活動の中で彼女は精神科医にもかかるほどであった。しかし困難な問題に遭遇した時、彼女は心理学ではなく宗教に拠り所を見出すことが多かった⁽²⁴⁾。

1961年父親が亡くなり、また施設の用地を獲得するために大変な苦労があった。紆余曲折の資金調達のための困難は、最後に1963年2月7日、王室寄金により施設建設のための購入寄金の3万ポンドが提供されたものの、都市計画で工事は6月まで延期された。さらに多額の資金が必要であった。シシリーは多額の寄付を集める才能を発揮した。11月に更に計画が練られ、保健省と王室寄金が更に承認され、そのほかの基金から寄付金が届けられていった。David Tasmaがシシリーに500ポンドを「貴方の家の窓の一つになるように」といって渡していったから既に20年が経っていた。1965年3月22日建設のための最初の鍬入れが行われ、儀式が厳かに執り行われた。1967年6月、始めて最初の住人達が到着し、13日には最初の長期入院患者が入所したのだった。礼拝堂が6月15日献納され、7月24日には後日St. Christopher's Hospiceのパトロンとなることに同意をしたアレクサンドラ女王が式典に参加したのだった⁽²⁵⁾。

第4章 St. Christopher's Hospice

— 施設訪問

1) Clinical Nurse Specialist の話

ここはDr. シシリー・ソングース氏が1967年に設立した世界の最初の代表的ホスピスとして有名で、世界中のホスピスの指標となるところである。訪問の折ここの予防疼痛専門のドクターのCathy Burn氏は以下の説明をしてくれた。

創立者のシシリー・ソングース女史は、1948

年当時まだソーシャル・ワーカーであったが、1938年にポーランドからロンドンに亡命してきていたポーランド系ユダヤ人のDavid Tasmaと出逢った。彼は孤独で収入も少なく、若くして末期がんであった。大病院に入院していたが、そこは若い彼には相応しくないとソングースは感じた。彼と話しあいが続けていくうちに、死を迎えるとはどのようなところなのかという夢が語られたのだという。この若者は死に臨み、自分が描いた夢の施設を作るときの窓を創る資金にして欲しいと遺言して、自分の財産の500ポンドを寄付金として残して行った。それはDavid Tasmaを記念する窓として現在も施設の一隅に残っているものであった。このことがシシリー・ソングースの医学に進むための切っ掛けとなって、彼女は32歳の時猛勉強をして医学部に進学をするのである。それまでのソーシャル・ワーカーから本当の夢の実現のための偉大なるチャレンジであった。父親もこれを支え、St. Tomas' Hospitalでナースをした後、ドクターになるまで19年かかった夢が1964年実現することとなった。St. Luke's Hospitalで研修医をしながら、St. Joseph's Hospiceでも働いていたシシリー・ソングースは近代ホスピスの予防を確立した医師として世に知られるようになった。ホスピス緩和と医学の概念、患者と家族に対する肉体的心理的側面に対するトータルケア、スピリチュアルな面での全人格的対応の必要性を示唆し実行していった。ホスピスケアとはチームを組織して行われる広大な労働を前提とするものである。1973年にSt. Christopher's Hospiceはオープンした。この施設のホームケアチームは1969年このホスピスができた2年後に、多種対応チームが専門チームとして最初の発足をした。経済的に恵まれていないこの地区では多種類の移民の人(ベトナム人、アフリカ人、アイルランド人、カリブ海の島からの人、バングラディッシュからの人、クルド人)などが集合してきている。この地区でのホームケアチームの活動はこの地区の100万人をサポートする視野で活動をする。多種の職種のチームのメンバーが協力して、情緒と霊性の支援のため本人と家族の人との会話をしてきた。

技術的にも支援をうけ、Dr. の指示のもとでナースがてきぱきと迅速に対応してきている。これに対して地元の人々も活動に賛成の気持ちを持ち理解し支援をしてくれているので、患者や家族との信頼関係ができていくのだという。

2007年40周年記念祭を祝っている。この施設は以下の2点でユニークな場所である。

- ① 1973年の時点で医療者の社会に向けた教育部門（技術革新・介護研究等）を持つ施設であったと共に、現在もこの任務は継続され、世界中からの医療従事者が参加している。1967年の創立から13年を経た1980年6月2日から6日まで5日間、国際会議が開かれた。世界16カ国から68名の代表（日本からも2人の代表—当時の聖隷ホスピス準備室チャプレンの齊藤武、淀川キリスト教病院・精神神経科部長、柏木哲夫の両氏）が参加したホスピス会議が開催された。以来教育プログラムは毎月多様な医療分野に及ぶ。世界的視野での実際的な研究と研修・教育が行われているのである。
- ② 1969年に世界で最初にホスピスのホーム・ケア（在宅治療）を始めた点、同時に全てが寄付金で賄われる、あくまでも独立した医療施設運営であると共に、研究機関でもあり続けている点がこの施設の特徴である。

2) この施設の活動の一コマ — Nigel Hardley, Director, Creative Living Center の話

予期しない患者との遭遇とコミュニケーションについて体験が語られた。一人の人間の全人的な人格を捉えることが困難なことがある。会話が十分に行われないと、ジグソーパズルのような人間関係になることがある。時間をかけ相手に関心を持ち、気長に相手の要求が何かを見届けることが必要なのであるが、時にはそれができないような困難さがあるときもあるのだという。しかし人生の中で重要なことは、相互にコミュニケーションをとることの必要性である。相手に良い印象を持ってもらえる努力がされなくては相手の好意は得ら

れない。心が通い合うこととは相手への配慮が先ず必要である。そうした積み重ねの結果が成果となると思う。本当に相手に真剣に対応しようとしているか否か。相手にそう思われているのか、言葉で語られなくても、目が何かを伝えていることもある。目でうなづくこともあるし、相手の分かる言葉でこれまでのいろいろな体験を通してわかってきていることなどを伝えてあげられるか、本当に相手は分かろうとしているのか等、問題は難しい。老人の場合は何回も同じことを繰り返す場合がある。このときの対応も準備していく必要がある。最後を迎えようとするときの時間は大切なものとなる。単純な表現をする言葉の中に重要なことが込められていることがあるのだ。最後の時間を告知された若い女性たちの悲しさを語り合っていた会話から、彼らの人生に対して持っていた希望の実現がもはや果たせないことにスタッフは気付いた。サポートができるかできないか、問題はいくつもあるのだが、今できることで彼女達のこれから残された人生の夢に少しでも近づくことができる。そのためのサポートができないかを時間との競争の中で探った。その実際の努力の過程が話された。6名の若い女性達が自分達の夢であったファッションショーを実現し、一般の観客の人々がこれを支援した物語であった。その記念（祈り）の記録がCDとして残されていた。それが上演されたのである。

ここに出演している人たちは今はもう誰もいない。6名の10代後半から20代初期の若い女性達。ある人は肺がんで、ある人は白血病、またすい臓がんの人もある。そう遠くないうちに死に行くこの女性達。ある日の昼、この施設の食堂で、Nigel Hardley氏は食事をとろうとしていたのだという。偶然この少女たちが近くのテーブルで食事をするところであったため、聞くとはなしに彼女たちの会話が耳に届いてきたのであった。自分たちのやつれていく身体への切ない思い、もっと上手にきれいに体型を維持していたかったこと、このごろ衣服がちゃんと身に合わなくなっているようだと思われること。きれいな服装で友人と町

に出かけていきかかったこと。好きな人からきれいな服を買ってもらったときの思い出など、彼女たちは過ぎていった素敵な思い出を語り、今の姿に言葉を失っていきやるせなさが、痛いほど彼に伝わってきたのだ。そうだこの子達の心の中に自分の姿の栄光を取り戻せないだろうか。どうすれば自分の姿を友人や家族の人に見てもらったとき素敵だといってもらえるのだろうか。若い女性たちはあれこれ思いを語り合い、今流行のあの衣装の姿は素敵だとかこの衣装の柄がよいとファッション雑誌を手に話していたという。このとき Nigel Hardley 氏はふと考えたという。彼女たちの切ない気持ちに何か元気を与えてあげることができないだろうか…。時間が過ぎ去れば彼女たちはここにいなくなってしまう。何かこの人たちの希望をかなえる手立てはないか。

その後彼女達の夢をかなえるため、スタッフ達はどのような支援をしたというのだろうか。Nigel Hardley 氏たちは行動を起こすことになったという。先ずロンドンのファッションデザイナー養成所の有名な服飾デザイナーに会いに行き、事情を説明し、支援の了解が得られるか否かを問い合わせたという。その結果ボランティアとして応援してもらい了解が得られたのであった。早速日を打ち合わせにきてもらいたいと頼んだ。講師とサポーターたちがボランティアとして来ることになった。指導と手ほどき、そして助手の応援を受けて、療養中の困難な体の人もいるのではあったが、彼女達は思い思いの服のデザインをし、自分の最後を飾れるファッションショーが催されることになったのである。思い出の日に向けてこの女性たちは自分の晴れ着の服装や帽子を自分の手で懸命に創ったのである。バック音楽も各人が自分の趣向で選び、その衣装を身に着けて、一般の人々や集まった施設の人々の前で自分ひとり1人の衣装を着こなし、一連のストーリーに仕立て上げた。ファッションショーの企画は晴れ晴れしく思いをこめて歩み、すばらしいイベントが完成されたのであった。…そして今このファッションモデル達は皆逝ってしまった。その映像記録だけが残されていた。自分の選んだ曲に乗って現れ、われわれの

前で微笑み、晴れがましく自分の仕立てた気に入った最高のドレスを身にまとい、人々の前で希望していた可能な限り最高の優雅さのポーズを演じて、微笑み笑っていたあの乙女たち…その主役達も今はもういない……。

この記録をスライドで見せてくれたスタッフ達の解説してくれる声はかすれ、咽んでいた。患者と共に生きていくこととはこんなにも重たく切実な現実と直面することだったのか、最後まで前向きに生ききった若い女性達のけなげな一人一人の、輝かしく演じて見せてくれたあのあどけない笑顔と自分で仕上げた輝かしい衣装の数々。それを着て歩く姿がいつまでも忘れられずに、今もあの映像の光景が浮かぶのである。共に介護しつつ患者に寄り添うスタッフ達の暖かい心が、視察をするわれわれの深い心の琴線に伝わって来るのだ。終了の後も深い静寂が漂っていた。本当のケアの意味の多様さと深さの重みを、身をもって感じたひと時であった。

施設内部の視察がこの後で行われた。施設の玄関脇の道路沿いに、あの「Tasmaの窓」はシシリーなくなった後のいまも、人々の希望を象徴する記念碑として柱にはめられていて、この施設へ訪れる人を感動させるのである。

まとめ

今の時代は健康な者でも生きていくのに困惑を覚える。ましてや弱者となって自力で生活が営めない人はなおさらであろう。高齢化した社会、病に冒され再起不能となる患者の増加、支援が必要な弱者の数がこれを支える人口をはるかに超える先進国では、時代の特徴的問題の対応として、社会が共同で取り組む配慮の必要が益々大きくなっている。混乱の社会にあって弱者をどのように支え、人の尊厳を守り合えるのか。日々の現実はこの問いかけの意味が重くなっているのが実情であろう。こうした活動は特に人の生命と直結するゆえに、伝統的価値観・人間観の基礎が問われるものでもあろう。この問題は、共同体が歩んできた考え方が基本的な受け皿となっていくものといえ

るだろう。一人一人の生き方の中で各人がこの現状の問題に的確に応じ、今後の社会のあり方に目途を立てることが緊急の課題として求められている。

ところで明治以来ヨーロッパに学び近代化に成功したといわれるわが国は、しかし弱い者への暖かい対応がいつでも後に積み残され、いわば使い捨てにされてきた観がある。これは社会の伝統的な教育や教養の問題であり、宗教観の問題であるが、これまでの論稿から、現代のわが国とヨーロッパ諸国の社会問題解決の方法に、大きな相違があると思われる。殊に共同体に生きている人々の心の姿勢が大きく関係するように思われる。これは古代のギリシャの指導者並びに一般自由市民の心の基盤に社会とは何かが問われた歴史が関係していると思われる。ホスピスの経営に学ぶ点があった。また宗教の活動が人々の生活を支えていると感じられた。

同時に宗教的に人間はみな神の前に等しく罪を犯していると見る‘人間性悪説’の立場は、救済者イエスの十字架により贖罪され、神の前に皆のものが社会的に平等に結びつけられることができる。イエスの教えに相互の扶助を行ない合う思想が、社会基盤となっている。これが西洋の文化的伝統の流れだと思ふ。

貧しい弱者を支えるのに宗教的な力が大きな基盤となったメアリー・エイケンヘッドの活動が、今日の時代にも広く西洋の指導理念となっていること、その流れの中でのシシリー・ソンドースが特に断末魔の終末期治療の道を確認した拠り所となった献身の活動を以上の論述で見えてきたが、このシシリー・ソンドースは看護師であり、ソーシャル・ワーカーのプロであり、終末医療のための疼痛緩和の専門医師として、人間とは何かを知り、多面的な社会実情に精通する能力を身につけていた。それゆえに終末をホスピスで迎える患者の介護支援は‘医師も看護師もソーシャル・ワーカーその他家族や関係する人々がみな平等の立場で、人生の最後を迎えようとする「去り行く人」の「人格と尊厳」に対する配慮を中心に、患者が‘平穏な状態で最後まで前向きな気持ちで生き切るため

の支援を實踐する事の大切さ’を身をもって明らかにできたのだと思う。

アイルランドの Mary Aikenhead から始まり、ロンドンの Cicely Saunders に至るまでの彼女らの偉業は、異なる人生の試練の中から弛まない努力により達成されたものであった。人生とは、人の数だけ語られるに値する価値を持ちながら、歴史の進む節目に、こうした特別の使命を担わされる人が、その困難さと立ち向かい、時代の流れを作り出す。こうした女性たちの多くの不屈な努力の事実には圧倒される思いは強い。

同時に社会の最先端で問題を認め、それを改善していくために立ち上がる指導者の高貴な心情（その基盤に、自己利益を抜きにした献身と奉仕の思想、文化的社会的教養の伝統、決して弱者を見捨てない姿勢といえるもの）を素直に認めると同時に、他の人の困難を自分の事として受け止めて、理想を掲げて立つ指導者を支え、これに協力しようとする多くの人の姿と、社会的伝統の絆の深さに感銘を受ける。

人は自己責任で自分の人生を築く。この基本姿勢の大切さは限りなく真理である。しかしわが国の最近の現実には、弱肉強食をそのまま手放しで肯定する社会となってしまった。多くの一般庶民の個人責任能力をはるかに超える次元で事態は展開している。社会全体の連帯意識は弱体化し、いくら個人の自己責任の実行を強調しても、無理な事は無理なのであろう。一般庶民が営む社会に対して、とりわけ社会の指導的立場の者が、開かれた社会への配慮、相互扶助の社会への規範を示し、人の存在への畏敬の意識を実行に移すのでなくては、増加する社会問題への解決の糸口は見出されるはずがないであろう。

日頃自己自身を律し、隣人相互の安全を共に図る共同社会への心構えを持つことに、不慣れとなってしまった日本社会の現実で、相互に思いやりつつ、助け合う配慮は今後益々必要となるだろう。西洋の社会活動の流れを辿って強く感銘を受けたのは、そうした指導、計画、推進、と歴史的な実践に裏打ちされた社会基盤の実績があったことである。

《注》

- (1) St. Joseph's, Hackney has been caring for the dying since the beginning of the Century and is among the pioneers of the work in Britain. This book records its many years of rich and continuous history, years which contain in microcosm all the elements that have helped to generate the modern hospice movement. — by Cardinal basil Hume — Archbishop of Westminster (The Making of Hospice, by Mary Campion, published by the Congregation of the Sisters of Charity, Mere St. London, E. 8. Media House, 34 Stafford Street, Liverpool L38LX 2006, pp. 1-2).
- (2) The spirit of one remarkable woman, Mary Aikenhead, dead these 120 years, still dominates the institution of Sisters of Charity Which she founded. As expressed in the Rule, in her letters and the work of her lifetime, she guides The Congregation to the present day, and it is not possible to review any aspect of the sisters' activities without encountering her name and the impress of her character. (*ibid.*, p. 5)
- (3) *Ibid.*, p. 26.
- (4) *Ibid.*, p. 61.
- (5) *Ibid.*, p. 62.
- (6) *Ibid.*, p. 65.
- (7) *Ibid.*, p. 66.
- (8) *Ibid.*, p. 67.
- (9) *Ibid.*, p. 75.
- (10) *Ibid.*, p. 83.
- (11) *Ibid.*, p. 84.
- (12) Cicely Saunders The founder of the modern hospice movement, Shirley Du Boulay, Hodder & Stoughton, London Sydney Auckland, 1994.
- (13) *Ibid.*, p. 32.
- (14) *Ibid.*, p. 40.
- (15) *Ibid.*, p. 42.
- (16) *Ibid.*, p. 65.
- (17) *Ibid.*, p. 69. At St. Mary's Cicely was one of twenty research fellows working on pain, but she was the only one specializing in pain in the terminally ill. It was about four patients dying of cancer and while researching it she had come across St. Joseph's Hospice in Hackney. She arranged to go there three day's a week observing the patients, evaluating the use of drug and, most important of all, listening. So began a relationship that was to have incalculable effects on both St. Joseph's and on Cicely.
- (18) *Ibid.*, p. 99. As with the wrestling over the spiritual foundations of the Home, Cicely's view modified as she prayed, thought and discussed; as, before, her views progressed quickly from confusion to some sort clarity. …… All I know is the way the Spirit has been leading me so far. If it is His way it will be all right if we follow Him slowly. I do not feel that we need hurry over this. It need not hold us now. We may not know till we begin. …… 'Now, though I have mentioned a "community", I do not mean that in a sense in which it is used by the religious order, but as a group of people rather closely held together by their common aims and Christian beliefs.'
- (19) *Ibid.*, p. 182. To make voluntary euthanasia lawful would be an irresponsible act, hindering help, pressuring the vulnerable, abrogating our true respect and responsibility to the frail and old, the disabled and dying. We should resist any effort to bring in such negative, uninformed, and mischievous legislation.
- (20) *Ibid.*, pp. 189-190. It was in 1969. Already the Hospice was succeeding so well in controlling pain and symptoms that they had thought possible. …… The first thing she had to do was enlist the support of the local general practitioners and district nurses. The patients would, after all, be returned to their care. This was an enormous challenge. At that time few general practitioner had heard about the success of the drug regimen used at St. Christopher Hospice in any case doctors do not welcome being told what they should do, especially by nurses.
- (21) *Ibid.*, p. 94.
- (22) *Ibid.*, p. 101.
- (23) *Ibid.*, p. 102.
- (24) *Ibid.*, p. 119.
- (25) *Ibid.*, p. 133.

参考文献

- The Making of Hospice, by Mary Campion, published by Congregation of the Sisters of Charity, Mere Str. London E. 8. Media House, 34 Stafford Street, Liverpool L38LX 2006
- Cicely Saunders, The founder of the modern hospice movement, Shirley Du Boulay Hodder & Stoughton, London Sydney Auckland, 1994
- St. Christopher's Hospice 40 years of Care and Innovation. 1967・2008, practising Innovation Education programme, 2008

Education & Training at St. Christopher's Hospice
- Supporting patient & families through education, 2008
ホスピス—その理念と運動, シシリー・ソンドース他

編, 岡村昭彦監訳, 雲母書房, 2006
報道写真家 岡村昭彦 — 戦場からホスピスへの道,
末沢和正, NOVA 出版, 1995